
【講 義】

蔵書印について① 「蔵書印の見方・読み方（概説）」

講師 堀川貴司（慶應義塾大学附属研究所斯道文庫教授）

蔵書印について 「蔵書印の見方・読み方―書物の伝来―」

慶應義塾大学附属研究所斯道文庫 堀川 貴司

一、蔵書印を調べる意義

書物は、1) 書かれた内容(テキスト)、2) 本という形態(モノ)、3) 受容の歴史、の3つの要素で成り立っています。書誌学は、主に2) について正確な記述を行うための方法で、それは1) を詳しく検討するための前提となるものですが、多くの場合3) についての記述も同時に行っています。それによって、その書物が各時代の文学や学問にどのような影響を与えたかを知る手がかりを提供することができ、文学史あるいは学芸史の研究に大きく貢献できるのです。

3) に関する書誌学的記述のなかで、重要な要素は蔵書印と書き入れでしょう。この二つは多くの場合連動しているため、蔵書印を調べることは書き入れをした人物の特定にも役立ちますし、たとえ人物の特定はできなくても、時代や地域が大まかにわかるだけでも意義があるでしょう。

なお、3) を中心に考えた場合、日本古典籍の範囲は、日本人がかつて所有していた書籍全体に及ぶこととなります。特に漢籍および朝鮮本は、長い受容の歴史があり、日本の書物文化を考える上で絶対に欠かせないものですが、現在の図書館においては管理上いわゆる和本と区別され、目録も別々に作られる事が多いのは問題です。日本古典籍を扱う司書・研究者は、3) の視点から、漢籍及び朝鮮本(場合によっては洋書)にも興味を向けてもらいたいと思います。

さて、3) の視点は、2) の記述を正確なものにするのにも役立ちます。すなわち、最初の受容者が特定できれば、その書物の成立の下限が確定するのです。日本においては、江戸時代の初期、社会の安定にともなって、知識人や支配層に蔵書家が多く出ました。この時期の蔵書印を持つ書物は、漢籍でいえば明版(みんぱん)以前、和本の写本でいえば江戸初期までの書写、版本でも五山版・古活字版あるいはごく初期の整版であり、いずれにしる貴重書として扱われるべきものです。さらにこのことは1) にも関わってきます。特に写本においては、書承関係を知ることが重要ですが、この時期の古典の写本は、公家を中心とした王朝以来の文化を継承する家に伝来した純良な本文を伝えるものが多く、信頼できる本文を持つ可能性が高いのです。

すなわち、3) についての正確・詳細な記述ができれば、それは1) をも包含した、その書物全体の性格を明らかにすることに多大の貢献をする、というわけです。

連綿と続いている文庫はいざ知らず、いやそういう所であっても、書物は集散を繰り返していきます。その書物が元々何処にあったのか、どういった書物群の中の一点として作られ、読まれたのか。あるいはその書物群がどのように形成されたのか。こういった研究にとっても、蔵書印の正確な記述が大きな威力を発揮するのです。

近年は海外に出て行った日本の古典籍に注目する研究者が多くなりましたが、和本ではなく、漢籍の場合、通常目録では中国から直接移動したのか、日本を経由して移動したのかがわかりません。蔵書印の記述があれば、かつて日本にいつ頃まであったものかが推測できます。それによって、日本における書物の受容や流通の歴史について新たな知見が得られることになるのです。

二、蔵書印の魅力と難しさ

古来中国では書を芸術の重要な一分野としてきましたが、書は決して筆で書かれるだけでなく、金属や石、あるいは土（陶製品）などに刻まれて残っています。印も同様の長い歴史を持ちます。特に印は所有者の権利や権威を示す重要な役割を担っているため、注意深く、最高の技術をもって制作されてきました。それだけに、美術的な価値も高いのです。そのような文化を受容した日本においても事情は同じです。特に江戸時代以降は古代文字の研究の進展と新しい流派の発生などがあり、発展しました。

なお、最初の統一王朝である秦が制定した篆書という書体が、碑文や書籍などの主流から姿を消した後、「篆刻」の名の通り、印の世界では命脈を保ってきたのは、権威を示すという印の役割に由来するものでしょう。

さらに、印の多くは朱あるいは赤色です。墨一色の書の作品に作者の落款印がアクセントとなるのと同様の視覚的効果を書物の上に生み出します。

問題は、なかなか読めないということです。篆書体は、古い象形文字の形を残している書体ですので、日頃見慣れている楷書体からの類推では読み解けない文字が多く出てきます。したがって、ある程度の訓練と慣れが必要になります。これはくずし字を読むための訓練と似ていて、いくつかのパターンを頭に入れ、それを適宜組み合わせることで、またよく使われる文字があるので、そこから前後を推測すること（文脈を読む）などが必要です。まずは「蔵」「印」「書」などの文字や、よく出てくる部首の形を覚えることが大事です。辞典類は形から引けるものがあるのですが、くずし字同様、正解に行き当たることはなかなかありません。部首を覚えておけば、漢和辞典式排列の辞書が使えます。こちらは用例が豊富で、似たような字も近くに並んでいますから、正解を探しやすいでしょう。

ただし、篆刻は限られたスペースに文字を配置するために、部首の移動や変形、字画の省略や逆に延長など、本来の書体（秦代あるいはそれ以前の金石文に記された文字）を逸脱した文字も用いるので注意が必要です。篆刻専用の辞典であれば、そういったものも挙がっていますし、よく知られている蔵書印や遊印（好きな言葉などを彫った印。揮毫のときなどに用いる）の図録を日頃からみておくことも訓練になります。

三、蔵書印の書誌的記述に関する注意点

A 位置

- *表紙・見返し・冊首・巻首・冊尾のいずれかがほとんど。（稀に途中に隠し印あり）
- *表紙の場合、右肩・右下・題簽内など。
- *冊首・巻首の場合、切り取りを恐れて文字にかかるように捺す人、文字を避ける人がいて、所蔵者の好みや主義が表れる。
- *冊首・巻首には、複数の印がある場合がある。印の色によって、同一所蔵者が複数捺しているのか、複数の所蔵者のものか判断できる場合がある。
- *複数の所蔵者が捺している場合、多くは下から上へと所蔵が新しくなっていくが、もちろん例外は多い。
- *複数の位置をセットにして捺す所蔵者もいるので見落とさないこと。（金沢文庫・小津桂窓・脇坂安元など）
- *冊の途中の巻首尾に印がある場合、押捺後の改装（合冊）を示唆するもの。

- *蔵書票とセットになっていることもある。（小津桂窓・平出鏗二郎など）
- *表見返の魁星印・蔵版印、序跋の落款印、刊記の版元印・売出印などは、刊行時あるいは販売時に既に実捺されているものなので、蔵書印と間違えないこと。
- *裏表紙左下の見返紙の裏に小さな印や書き入れがあることがある。これらは、その本を扱った古本屋の心覚え。場合によっては記述の対象としてよいか。

B 色

- *朱あるいはそれより濃い赤が多い。まとめて「朱」としてよい。
- *寺院・僧侶には黒が多い。（彭叔守仙の「善慧軒」など）
- *朱以外の色の印は凶事あるいは諒闇（天皇の死去に伴う服喪期間）のときに用いるという説もあり、実際に学習院の蔵書には、大正元年～三年受け入れの書籍には黒印が用いられている（学習院大学東洋文化研究所編『知識は東アジアの海を渡った—学習院大学コレクションの世界』丸善プラネット、2010年）。また、蔵書の種類による使い分けがあり、相見香雨は珍書に緑印を用いたと言われ、脇坂安元は漢文書に朱、和文書に緑を用いているようである。
- *朱色の鮮やかさは印泥の質による。（三井家のは上質らしく、実に鮮やかである）

C 陰陽

- *陰刻（字が白抜きになる…白文とも）と陽刻（字に色が付く…朱文とも）とがある。（なお、封泥の場合陰陽が逆転して紛らわしいから、陰陽の語は避けるべきだとも言う）

D 大きさと形

- *公的機関・寺院・大名家などは大きい方印（正方形の印）・または長方印が多い。
- *方印・長方印・円印・俵型印・楕円印のほか、菱形（田村建頭「芸叢（うんそう）」）・瓢箪型（彰考館）・鼎型（壺印とも）などがある。鼎型は室町から江戸初期にかけて禅僧や学者に多いが、これは揮毫の際などに用いる落款印を蔵書印としても用いたものであろう。（英甫永雄など）
- *枠も、本の匡郭同様単枠・双枠がある。
- *黒の円印あるいは長方印で、地名や屋号が入っているものは、貸本屋の印である可能性が高い。通俗的な版本に限らず、比較的高尚なもの、美しい写本などにも捺されていることがある。まだ本格的な集成・分析等はなされていない。

E 字体

- *篆書（それ以前の甲骨文・金石文を含めて）が多いが、草・行・楷や仮名も。
- *「金沢文庫」印を摸倣したためか、長方縦長・双枠の印には楷書が多い。

F 印記（印に書かれている内容）

- *多くは「所蔵者の姓・名・字・号など」＋「蔵書・図書・之印・蔵書印・蔵書記・文庫など」というパターンなので、よく使われる字は覚えておく。
- *読めない場合は篆書の字典、落款印譜、もしくは人名辞典類（『漢文学者総覧』『和学者総覧』など）を参照する。
- *書物を扱うときの注意、寄贈の趣旨、子孫への願いなど、文章を記すものもある。
- *絵入りのものもある。（曲亭馬琴の草庵、内田魯庵の猫、淡島寒月の鴉などが有名だが、装飾として龍や虎をあしらうものも多い）
- *回文印（方印の四文字を左回りに読んでいく印）もあるので注意。

G その他

- *印でなくても、「〇〇常住」「〇〇什物」（寺院に多い言い方）「〇〇所蔵」などと墨書のある場合、識語というよりも蔵書印に準じて扱うべきであろう。
 - *蔵書印は必ずしも所蔵者自身が捺したとは限らない。蔵書の継承者が捺す場合（林羅山の「江雲渭樹」は子の鷲峰が羅山死去後に捺した）、蔵書売り立てなど、その家を離れたり散逸したりする前後にまとめて捺す場合（大野洒竹の「洒竹文庫」、森鷗外の「鷗外蔵書」、九条家の「九條」など）がある。また、本人は死んでも本人所用の印は残っているので、本人とは関係ない書物に妄りに捺されることもある。この場合は、残念ながら蔵書印が年代判定の決め手にならない。
 - *逆に、公家や学者の家で、歴代の蔵書が重層している場合に、それぞれの当主の所用印が異なることがわかれば、その書物の収蔵年代が特定できる。
 - *捺印のことを「鈴（けん）」、印影の数の単位は「顆（か）」と言う。
- 以上をふまえて、たとえば

印記「〇〇／〇〇」（毎冊首右下、朱陽長方双枠、○・○×○・○糧）

などと記します（斜線は改行を示す）。もっともこれは非常に詳しい記述であり、通常、印記のみ、あるいは印記と大きさだけでもよいでしょう。また、形状については「朱陽方」でないもののみについて記す、と決めておいてもよいと思います。

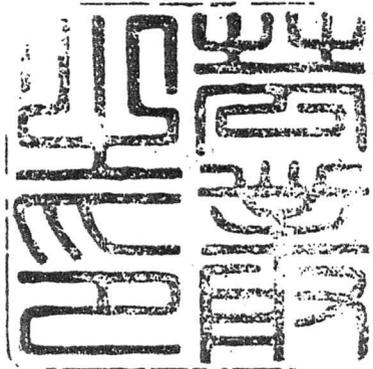
四、参考書（基本的なもの、最近のものを中心に）

- *小野則秋『日本の蔵書印』（『日本蔵書印考』藝文社・1943年の改訂版、臨川書店復刊・1977年）…全般的な解説。図版や印記索引もある。
- *島原泰雄・渡辺守邦『蔵書印提要』（日本書誌学大系 44、青裳堂書店・1985年）…既刊蔵書印譜のデータを網羅した印記集成。
- *渡辺守邦・後藤憲二『新編蔵書印譜』（日本書誌学大系 79、2001年、増訂版全三冊、同 103、2013～4年）…既刊蔵書印譜を網羅した印影集成。
- *中野三敏『近代蔵書印譜』全五冊（日本書誌学大系 41、1984～2007年）…伝記が不明な人も多かった近代の蔵書家についての略伝と印影。
- *国立国会図書館編『人と蔵書と蔵書印 国立国会図書館所蔵本から』（雄松堂書店・2002年）…同館ホームページでも公開。<http://www.ndl.go.jp/zoshoin/index.html>
- *宮内庁書陵部編『書陵部蔵書印譜』全二冊（図書寮叢刊、明治書院・1996～97年）…前掲書と同様、伝記も詳細、収録人数・機関数も多い。
- *蔵書印データベース（国文研）http://base1.nijl.ac.jp/~collectors_seal/
- *九大コレクション（九州大学附属図書館）<http://catalog.lib.kyushu-u.ac.jp/ja>
- *中国歴代人物印鑑データベース（浙江図書館）<http://diglweb.zjlib.cn:8081/zjtszg/gjcj/index1.htm>
- *水田紀久『日本篆刻史論考』（日本書誌学大系 43、1985年）
- *落款字典編集委員会編『必携 落款字典』（柏書房・1982年）…主に落款印を集めたものだが、蔵書印も含まれる。この種のもの多数あり。
- *高田忠周『朝陽字鑑精萃』（西東書房・1989年）
- *小林石寿『五体篆書字典』（木耳社・1983年）
- *丘襄二『篆楷字典』（国書刊行会・1976年）…形から引く。

此の書目、近世に於ける本朝無題詩の研究と考査（『和漢比較文学』13、1947）
 平安後期の漢詩集。本朝無題詩の伝本一覽。伝本を知る上で印記が大きな役割を果たしている。

- [伝本一覽] ^ ^内略号
 ○十卷本
- ① (底本) 新潟大学附属図書館佐野文庫本 印記「今出河蔵書」(菊亭家)
 - ② ^彰^水府明德会彰考館本 印記「彰考館」
 - ③ ^伊^宮城県図書館伊達文庫本 印記「伊達伯親瀾閣図書印」(仙台伊達家)
 - ④ ^吉^吉田幸一氏蔵本 印記「豊蔀家庫」「芸叢」(田村宗永)
 - ⑤ ^和^国立公文書館内閣文庫本(和学講談所旧蔵本) 印記「和学講談所」
 - ⑥ ^長^長澤孝三氏蔵本 享保二〇年(一七三五)書写奥書あり。
 - ⑦ ^東^東京大学総合図書館本 大正二三年登録。
 - ⑧ ^塩^塩竈神社本(村井敬義旧蔵本) 天明六年(一七八六)村井忠著献納。
 ○三卷本二類
 - ⑨ ^国^国立国会図書館本 享保七年(一七三二)松岡玄達書写奥書 印記「怡顔齋」ほか(松岡玄達)
 - ⑩ ^史^東京大学史料編纂所本 印記「冷泉府書」(冷泉為経)「西荘文庫」(小津桂窓) なお為経自筆である旨を記した識語が巻末にある。
 - ⑪ ^宮^宮内庁書陵部本
 - ⑫ ^京^京都大学附属図書館本(河野鉄兜旧蔵本)

- ⑬ ^山^山口大学附属図書館棲息堂文庫本 印記「惠藩蔵書」(徳山毛利家)
 - ⑭ ^多^多和神社多和文庫本(松岡調旧蔵本) 元治二年|| 慶応元年(一八六五)取得識語あり。
 - ⑮ ^三^賀茂別雷神社三手文庫本(今井似閑旧蔵本)
 ○三卷本一類
 - ⑯ ^洋^東洋文庫本 印記「八雲軒」ほか(脇坂安元)
 - ⑰ ^松^島原図書館松平文庫本 印記「尚舎源忠房」ほか(松平忠房)
 - ⑱ ^内^国立公文書館内閣文庫本 寛文七年(一六六七)林鴛峰令写奥書
 - ⑲ ^蓬^蓬左文庫本 印記「御本」(徳川義直)
 - ⑳ ^岸^実践女子大学山岸文庫本 印記「平安堀氏時習齋蔵」(堀立庵カ)
- 他に三卷本系統の抄出本として二本ある。
- ㉑ 神宮文庫本 天明四年(一七八四)村井敬義献納
 - ㉒ 都立中央図書館加賀文庫本 文化一三年(二八一六)林敬之書写奥書
- なお、未見及び所在不明本に、山田孝雄氏旧蔵本・川口久雄氏旧蔵本(川口久雄『平安朝日本漢文学史の研究』に見える)、松下見林本(本稿参照)・豊島終吉本(群書類従刊本の対校本)・阿部北溟本(国会図書館本の対校本)があり、他に関東大震災で焼失した東京帝国大学附属図書館本(明治四四年の目録に載る。平泉澄「厭世詩人蓮禪」^『我が歴史観』昭元刊^に言及あり)があった。



(大野屋 宗永)

(尾浦 宗永)



(船越 宗永)



(市島 春城)



(三春藩 秋田 宗永)



(波多野 宗永)



(日新編 成古 印譜 5)



(島田 宗永)

(波田 宗永)

別

(阿波 宗永)

